［二〇〇五年度大会シンポジウム］特集　転生する神話――「日本思想史」は描きうるか

近世日本の神話解釈――孤独な知識人の夢――

前田　勉

1

本居宣長という人を想うとき、いつも頭に浮かぶものは「端原（はしはら）氏城下絵図」である。それは、宣長が一九歳のころ描いた架空の絵地図で、現在、松阪の本居宣長記念館に所蔵されている。記念館の『名品図録』解説によれば、「城下は北は山を隔て嶋田川、南は紅葉川に接し、東は四群湖に望む地」が描かれ、中央の「御所」を中心に、碁盤の目状の道が走っている、きわめて精密な地図である。解説によるならば、宣長は地図ばかりか、これを補足する、城主「端原氏」の系図も『古今選』（宝暦八年成稿）の紙背に書いていたという。そこには、たとえば「端原宣政は親安四年十一月十八日生まれ、親雅十四年二十二歳で端原氏二千石の十五代当主」となった、と克明に記されていた。この詳細な絵図と系譜について、『図録』の解説者は「『大日本天下四海画図』『経籍』『都考抜書』から始まり、亡くなる直前の『鈴屋新撰名目目録』（未完）まで生涯続く宣長の類纂に対するモノマニアックなまでの性向や、系譜への関心の一つの表われであったかもしれない」と指摘しているが、この意見に同意するとともに、もう少し想像をめぐらせてみたい。

この絵図を描きはじめた延享五年（一七四八）、七月には改元して寛延元年となったこの年の一一月に、宣長は紙商

人今井田家の養子となっている。商人として修業を積むためである。われわれにとって興味あるのは、ちょうどこの年、宣長はこの絵図と軌を一にして、作歌をはじめ、生涯を貫くことになる王朝文化への憧れを強めていたということである。つまり、宣長は商人としての勤めに反発するかのように、王朝文化への憧憬を抱き、架空の地図をマニアックに描き続けていたことになる。周囲の雑音を遮断して、空想の世界に浸る青年宣長の姿が思い浮かぶではないか。それは、定められた商人になりきれずに、夢の世界で王朝世界の一員に連なろうとする青年宣長の姿である。

周知のように、宣長は結局、商人にならなかった。というよりは、なれなかった。彼は「ねがふ心にかなはぬ事有しによりて」（『家のむかし物語』）、寛延三年（一七五〇）一一月には今井田家を飛び出し、松坂に帰ったきりそのまま一二月には離縁してしまった。そのため仕方なく、母おかつは宣長を医者にしようとして、宝暦二年（一七五二）京都に遊学させた。宣長はそこで自由な青春生活を送ったのち、松坂に帰ってからは、生涯のほとんどを「町医師」（『系譜下書』）として過したのである。彼は内科医として模範的な生活を送ったが、その単調な生活はどこか飽き足らないものがあったろう。その物足りなさを埋め合わせるもの、それが宣長にとっての『古事記伝』執筆であったろう。三四歳のときに着手し、六九歳の完成まで足掛け三五年に及ぶ、途方もなく長い時間をそれに費やしたのである。宣長は中二階の一室で、梯子をはずして外の世界と遮断して、疲れると時々、鈴をうち鳴らして心を癒しながら、『古事記伝』を延々と書き綴った。

一つの想像だが、この大著『古事記伝』で描きだした「神代」の世界は、宣長が「端原氏城下絵図」に夢見た世界の延長線上にあるのではないか。それは、一九歳の青年のみた夢の続きではなかったか。近世日本の神話解釈という筆者に与えられたテーマを考えるにあたって、この宣長の「端原氏城下絵図」を最初に取り上げたのは、江戸時代の人々にとって神話がどのような意味をもっていたのかという答えが、この絵図を描く宣長の姿にあるように思えるからである。結論を先取りすれば、江戸時代の人々にとって記紀神話とは、孤独な知識人の夢であった、筆者はそう考えている。本稿では、そうした仮説を述べてみたい。

2

宣長にとっての「神代」の世界とは何だったのかという点について、まず、指摘しておかねばならないことは、彼の描き出した「神代」の世界が彼自らの生き方の指針に

なっていたという点である。周知のように宣長は、「人は人事を以て神代を議るを、世の識者、神代の妙理の御所為を識ることあたはず、此を曲て、世の凡人のうへの事に説なすは、みな漢意に溺れたるがゆゑなり」我は神代を以て人事を知れり」（『古事記伝』巻七）と述べていた。この箇所をいかに解釈するかは、宣長理解のひとつのポイントとなってきたが、ここでは「神代」の世界が一九歳の青年のみた夢の延長線上にあったという仮説から、この「神代」と「人事」を夢と現実と言い換えてみよう。もしそう言い換えることができるとすれば、宣長にとって、「我は神代を以て人事を知れり」という言葉は、夢が現実よりもリアリティーがあるということになるだろう。彼の主観からすれば、「神代」の夢は現実の反映ではなく、逆に現実の「人事」を規制するものなのである。ここでは、夢と現実の価値の転倒がなされているといってもよいだろう。もちろん、宣長を批判する江戸派国学の総帥村田春海からみれば、それは所詮「痴人の夢」（『明道書』）であったにしても、宣長の主観に即するかぎり、どこまでもそう信じられたのである。

村田春海や、有名な上田秋成らの批判は十分予想されたにもかかわらず、宣長が「神代」のリアリティー、夢の確かさを主張しえた理由はどこにあったのかといえば、それは、子安宣邦氏が指摘しているように、「神典のまま」という言説にあった。宣長によれば、「中昔」以来、「神典」を説く人たちは、「古の意言」を尋ねようとも思わず、ただひたすらに「外国の儒仏の意」にすがって、「理」ばかりを論じて、まったく「古の意言」を知らないために、「漢意」の理の外に別に、「いにしへの旨」があることを知ることができなかった。このために、「いにしへの旨」はことごとく埋もれしまってしまった。ところが、「おのが神の御書をとく趣は、よのつねの説どもとはいたく異」にしているとして、宣長は言う。

おのがいふおもむきは、ことごとく古事記書紀にしるされたる、古の伝説のまゝ也、世の人々のいふは、みなそのまどひ居る漢意に説曲たるわたくしごとにて、いたく古伝説と異也、此けぢめは、古事記書紀をよく見ば、おのづから分るべき物をや、もしおのが説をとがめむとならば、まづ古事記書紀をとがむべし、此御典どもを信ぜんかぎりは、おのが説をとがむることえじ、（『玉勝間』巻二）

宣長は「漢意」に付会された秘伝を否定して、確かさの根拠を「神典」それ自身においた。しかも、主要な「神典」とは、漢文の潤飾がほどこされた『日本書紀』ではなく、「古伝説」をありのままに記述したとされる『古事記』であった。そして、その『古事記』を「神典のまま」に理解する方法が、「古語」にもとづく文献学的な方法であっ

たことは言うまでもない。宣長はこれを京都遊学中、契沖の著作から学んだ。それは近代にも通じる学問の客観性を誇るものであったことは周知の通りであるが、宣長の場合、どこまでも夢を細部まで描き出していく手続きであったことは注意しておかねばならない。

この「神典のまま」という排他的な言説の画期性は、子安氏によれば「近世の神々をめぐる言説空間に、差異の断層を穿つような事件性をもって登場してくる」（『本居宣長』、岩波新書、一九九二年）。この画期的な意義は本稿の関心からすれば、『古事記伝』で描きだした「神代」の世界が、「端原氏城下絵図」のような宣長だけの空想の産物ではなくなって、厳密な学問的な手続きを踏むことによって、だれにでも想い描きうる公共的な広がりをもった点にある。つまり、秘伝という特別な装置なしに、だれもが「神代」という壮大な「絵図」作成に参加し、夢見ることができるようになったのである。宣長は「吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に、又よきかむがへいできたらむには、かならずわが説にななづみそ、わがあしきゆゑをいひて、よき考へをひろめよ」（『玉勝間』巻二）と弟子たちを励まし、自由討究の必要性さえ説いた。ここに至り、宣長の夢想は彼個人の遊戯ではなくなって、「皇国」の人の共同幻想になる可能性を開いたともいえよう。周知のように、この「神代」の「絵図」作成のために、全国津々浦々から多くの門人が宣長のもとに集まり、享和元年（一八〇一）には四十余国、約四百九十人の門人数を数えたのである。

3

では、宣長が夢想した、彼自らの生き方をも規制する「神代」の世界とはいかなものであったのだろうか。それは、没後の門人平田篤胤をはじめとする多くの人々が「神代」の絵図作成に参加し、宣長同様に、自らの生きる指針とするような魅力的なものであったのだろう。どこにそれほどの魅力があったのだろうか。宣長が生涯を賭けた『古事記伝』全体がその答えを示しているのであるが、なかでも『古事記伝』巻一の終りに掲げられた『直毘霊』と、『玉くしげ』『くず花』などの古道論の書がその答えをもっともよく提示している。以下、これらの古典的な書によって、筆者の一つの解釈を示してみよう。

宣長は「神代」の世界を描くにあたって、「漢意」に汚染された『日本書紀』ではなく、「古伝説」をありのままに記述したとされる『古事記』を中心に置いたのであるが、彼には、『古事記』がその世界観・コスモロジーにおいて、『日本書紀』と異なっているという認識はなかった。その

点では、両者が異なる世界観・コスモロジーをもっていたことを指摘している神野志隆光氏のような視点は宣長には存在しなかった。というよりは、むしろ宣長は『古事記』を補うものとして『日本書紀』を積極的に利用した。たとえば『玉くしげ』のなかには、『日本書紀』の一節が重要な意味を担って、引用されているのである。その箇所とは、天壌無窮の神勅と顕幽界の分離という二つの箇所である。

此天照大御神の、皇孫尊に葦原中国を所知看せとありて、天上より此土に降し奉りたまふ、其時に、大御神の勅命に、宝祚之隆当与天壌無窮者矣とありし、此勅命はこれ、道の根元大本なり、

（『玉くしげ』）

大国主命、此天下を皇孫尊に避奉り、天神の勅命に帰順したてまつり給へるとき、天照大御神　高皇産霊大神の仰せにて、御約束の事あり、その御約束に、今よりして、世中の顕事は、皇孫尊これを所知看すべし、大国主命は、幽事を所知べしと有て、これ万世不易の御定めなり、

（『玉くしげ』）

この両者が宣長の古道論にとって重要なものであることはいうまでもない。宣長にとって、『古事記』と『日本書紀』とは補完しあうという意味で、どこまでも記紀神話であったことは、この二つの箇所からも明らかである。

この二つのうち、天壌無窮の神勅が天皇家の正統性を神話的に根拠づけるものであったことは言うまでもないことであるが、宣長にとって神勅はそれのみならず、彼個人の生き方、彼個人の心の奥深くにかかわるものとしてとらえられていたことに着目しなくてはならない。そのことは、次にあげる『直毘霊』の本文に示されている。

そも〳〵此ノ天地のあひだに、有リとある事は、悉皆に神の御心なる中に、禍津日神の御心のあらびはしも、せむすべなく、いとも悲しきわざにぞありける。然れども、天照大御神高天原に大坐々て、大御光はいさゝかも曇りまさず、此ノ世を御照しましまし、天津御璽はた、はふれまさず伝はり坐て、事依し賜ひしまにまに、天の下は御孫命の所知食て、天津日嗣の高御座は、あめつちのむた、ときはにかきはに動く世なきぞ、此ノ道の霊く奇く、異国の万ツの道にすぐれて、正しき高き貴き徴なりける。（『直毘霊』）

ここで宣長は、禍津日神の「あらび」がもたらす不幸・不運が「せむすべなく、いとも悲しきわざ」であると受け止めつつも、「然れども」と言い返している。宣長によれば、「皇国」の人はそう言い返すことができる特権的な位置にいる。というのは、日本には「古伝説」をそのままに

記述した『古事記』が伝わっているし、何より、そのことを事実として証明する、天照大神の子孫としての天皇が今現在ここにいるではないか。宣長はそう人々に呼びかけているのである。ここで注意したいのは、「然れども」の逆接で結びついている、禍津日神と天壌無窮の神勅との関係である。筆者はここに宣長理解の鍵があると考えている（以下の論は、拙著『近世神道と国学』〈ぺりかん社、二〇〇二年〉、『兵学と朱子学・蘭学・国学』〈平凡社選書、二〇〇六年〉を参照されたい）。

宣長の神学のなかで特異な位置を占めている禍津日神は、不条理な現実に対する神義論的な救済論を意味していたと思われる。禍津日神説は、なぜ不幸がよりによって自分にふりかかってきたのか、その不条理の起ってきた理由を指し示すかぎりにおいて、たとえ死後に極楽や子孫の幸福を約束していないにせよ、ひとつの救済を提示していたのである。ここで問題となるのは、二つある。その一つは不条理な現実とはいかなるものであったのかという点である。それは、宣長がどのように現実を認識していたのかの主観的な問題であるとともに、社会経済史的な視点から客観的にとらえねばならない問題である。もう一つの問題は、不条理感を懐く者が、「然れども」と言い返して、天壌無窮の天皇を仰ぎ見たという点である。ここでは、天壌無窮の神勅は天皇家の正統性を保証するという次元にとどまらず、不条理感を懐く「皇国」に生きている個々人の内面にリンクするものとしてとらえられているのである。

まず、第一の問題についていえば、筆者は宣長の不条理感は商品経済の進展、経済社会化によって、家柄や身分にもとづく階層秩序が崩壊していくことの反映であると考えている。宣長の『秘本玉くしげ』によれば、今の世の中は、カネがカネを生んでいくという。貧富の格差がますます拡大しているという認識をもっていた。宣長は経済社会化の進展にともなって、「勝者と敗者」が生れ、資本の力によって貧富の差が拡大している事態を、鈴屋の書斎で、苦々しい思いをもって見つめていたのである。思うに、競争が進行している経済社会のなかでは、身分的な階層秩序のもとで先祖伝来の家業に励み、律儀に生きている者は大きな不安を抱かざるをえない。彼らは真面目に生活しているにもかかわらず、自己の力ではどうしようもない何かによって翻弄されていると感じたろう。それが不条理な世の中への憤懣となっていた。

もう一つの問題、すなわち不条理な現実にもかかわらず、「然れども」と言い返して、天壌無窮の神勅の絶対性を説くことの意味である。宣長によれば、「神代」以来ずっと、「皇国」の人は貴賤上下の別なく、天皇に随順してきたの

であって、「天地のあるきはみ、月日の照す限リ」永遠に、そうあるべきだという。

宣長によれば、今、ここにいます「吾天皇尊」はそのまま「神」である。この「人の中の神」として「凡人（クダビト）とは遙に遠く、尊く可畏く坐ます」（『古事記伝』巻三）天皇に「善悪き御うへの論ひをすて、ひたぶるに畏み敬ひ奉仕」することが「まことの道」、すなわち臣下としての「皇国」の人の道徳であった。重要なことは、天皇が天照大神の御子として「天つ神の御心を大御心」（『直毘霊』）とするように、上は将軍から下万民にいたる「しもがしもまで、たゞ天皇の大御心を心として、ひたぶるに大命をかしこみゐやびまつろひ」（同右）、随順すべきことを求めたことである。ここで、注目したいことは、貧富の差の拡大という商品経済の進展のなかで、律儀に生きる者たちの救いの対象として天皇が仰ぎ見られている点である。ここでは、家業の勤めに孜々として励む「凡人（クダビト）」の平凡な日常生活は、「天皇の大御心を心」とする神聖な営みとなっているのである。「凡人」は、先祖伝来の家業を律儀に勤めてきたにもかかわらず、報われず、真面目な者がなぜ幸福になれないのだという不条理感・憤懣を抱くこともあるだろう。そうした「世の中」の悲しみに耐えて生きる「凡人」に対して、宣長は、今、自分に与えられた家業を勤めることが、そのまま「天皇の大御心を心」とする神聖な営みであって、そうした生き方こそ、「神代」以来の正しい、「皇国」人本来の生活であると教えていたのである。

このような「神代」の夢によって意味づけられた生き方が魅力をもつ理由は、ナショナリズムを宗教の「代替物」ととらえるイギリスの社会学者アントニー・スミスが指摘しているように、それによって、「とるにたらぬ塵のごとき今の自分を清め、凡庸な存在から抜けだして、共同体の「真」の運命をになうことができるようになる。理想化された過去と自分を同一視することは、価値のない、醜い現在の自分を乗り越えることに役立つ。そして死を超越し、生のむなしさを払拭する統一体の中で、一人一人の人生に永久に重い意味が与えられることになる」（『ネイションとエスニシティ』、巣山靖司他訳、名古屋大学出版、一九九九年）からである。夢のなかで、凡庸な生は栄光ある人生に転換する。ここにこそ、宣長の夢想した「神代」の絵図が多くの人々を惹きつけた魅力があったのではないか。そしてこの魅力ゆえに、鈴屋の四畳半の夢想は彼個人のものから多くの人々の共同幻想となって、「皇国」日本というネイションを立ち上げる原動力の一つとなっていったのである。

（愛知教育大学教授）